

熊谷公男編

『アテルイと東北古代史』

佐藤 英雄

二〇一六年一月一二日、京都市東山区の清水寺においてアテルイとモレの慰霊法要が営まれた。清水寺には、いわゆる清水の舞台の下近くに「阿弓流為・母禮之碑」が一九九四年に建立された。それ以来二三回目の法要である。

清水寺の建立には坂上田村麻呂が関わっており、加えて坂上田村麻呂とアテルイとの関係から、清水寺にアテルイの慰霊碑が建立されたのである。坂上田村麻呂とアテルイとの関係は座談会のなかで各人の視点から論じられており、本書の中で確認していただきたい。

本書は二〇一三年に東北古代史の第一線で活躍する五人の研究者が集い開かれた、アテルイを中心に据えた東北古代史についての座談会の記録であり、構成は以下の通りである。

序論 アテルイと東北古代史：熊谷公男

第I部 座談会 アテルイの歴史像

I アテルイの育った世界

II アテルイの参戦と延暦八年の戦い

III 延暦十三年・二十年の戦いとアテルイの降伏

IV アテルイが残したもの

第II部 考古学とアテルイの世界

胆沢城・志波城・徳丹城……西野 修

志波・和我の集落遺跡……村田 淳

胆沢周辺の集落遺跡と墳墓……高橋千晶

アテルイ関係史料

序論では、三十数年にわたり東北古代史の第一線で研究を進めてきた熊谷公男氏が、東北の八世紀史の概略を論じている。いかなる研究論文も史料に基づく記述ではあるが、本稿は座談会の記録を読む前に「基本となる歴史的事実」(五二頁)を記述するという性格上、通常以上に行間に典拠史料の存在を感じることができる。

第I部は本書のメインとなる座談会の記録である。文献史学から熊谷公男氏、樋口知志氏、鈴木拓也氏の三人が、考古学から伊藤博幸氏、八木光則氏の二人が参加し、五人により、基本的に時系列に沿って討議が進められている。熊谷氏は広範な研究視角から東北古代史に論及し、政治史・蝦夷論・城柵論に多大な成果を上げている。樋口氏は細部にわたる史料読解と新たな研究視角の提示により、三陸地方の古代史へ論及し、新たな展開を生んだ。また、座談会の直後には『阿弓流為―夷俘と号すること莫かるべし―』(ミネルヴァ書房、二〇一三年)を上梓している。『阿弓流為』は本座談会と直接的に関係しており、論述進行と座談会の進行とがおおむね一致している。鈴木氏は古代奥羽の官制・兵制・税制に造詣が深く、その成果は『古代東北の支配構造』(吉川弘文館、一九九八年)・『蝦夷と東北戦争』(吉川弘文館、二〇〇八年)に代表される。

伊藤氏は長く胆沢城の発掘・調査・研究に尽力し、胆沢地方の古代史研究に大きな成果を上げている。八木氏は広く岩手県内の古代史に、考古学の立場からアプローチし、『古代蝦夷社会の成立』（同成社、二〇一〇年）として物質文化からみた古代社会を描き出している。（代表的な単著のみを掲げた。共著や論文については、本書末尾の執筆者一覧をご覧ください）

「Iアテルイの育った世界」では主としてアテルイも含めた周辺の社会的・政治的・地理的動向について議論が広げられた。アテルイが活躍する世界の基本的考察が共有されている。「IIアテルイの参戦と延暦八年の戦い」では、アテルイが史上に現れる直前の八世紀後葉の戦乱から討議が開始される。「三十八年戦争」といわれる戦乱が続く時代である。議題の中心はアテルイの参戦時期と、戦乱の拡大の原因、そして最も議論が白熱したことは延暦八年の戦いにおける朝廷軍の兵数の算出方法である。樋口氏が通説とは異なる史料読解を示すが、座談会においては否定的に受容されている。「III延暦十三年・二十年の戦いとアテルイの降伏」では、延暦期の第二次・第三次の戦いの詳細究明を試みる。『日本後紀』の欠失部分にあたり関係史料が著しく断片的であり、全貌を明らかにすることはなかなか難しい。それゆえ第一線の研究者が見せる史料批判の方向性や、これまでの研究成果、各人の研究視角の違いが現れ、歴史研究の醍醐味が味わえる箇所でもある。アテルイ側の動静は不詳といわざるを得ないが、朝廷側の軍編成から延暦八年の戦いとの違いを浮き彫りにし、桓武天皇・坂上田村麻呂とアテルイ・蝦夷社会の関係に迫る。延暦期を通じた征夷の意義や、桓武天皇にとっての征夷とは何

であったのか論議された。「IVアテルイが残したもの」では、九世紀初頭の城柵の建造（胆沢城・志波城・弘田柵）や改修（多賀城・秋田城）とアテルイの降伏、そして征夷の終結の契機とされる徳政相論が論議される。特に志波城建造の意義と、徳政相論の構造・意義について議論が白熱している。最後は、蝦夷とは何者であったか、古代国家にとって華夷思想の中での蝦夷とは何であったかに論議がおよび、座談会が終了となる。

第II部では西野修氏・村田淳氏・高橋千晶氏の三者が、座談会の中で考古学分野からの議論が及ばなかった点について、それぞれ岩手県内の城柵、志波・和我地方の集落、胆沢地方の集落と墳墓を主題として論考を載せている。第I部では議論のほとんどが文献史学からの発言となっていたため、考古学からの東北古代史や胆沢・和我・志波の社会情勢などは比較的討議が少なくなっており、「アテルイ」を語るうえでは第II部に収められた三編は非常に有意義である。

以上、本書の概略を論じてきたが、筆者の関心から三点ほど論じたい。まず、何よりも、「なぜ、このときにアテルイなのか」である。本書の構成に示したように、本書には全編を通じた課題がなく、アテルイを主題とする座談会がなぜ行われたのか、この座談会の学界における意義を何処に求めているのか等が明記されていない。座談会の冒頭に伊藤氏は、二〇一三年放送のNHKドラマ「火怨・北の英雄 アテルイ伝」の歴史考証（鈴木氏を除く四者が担当）に対して、鈴木氏を加え「アテルイをめぐる歴史について、考えなおしてみようという企画」である旨を

述べている。したがって、本書の元となる座談会の目的が記されていることになるが、それでもなぜアテルイなのか、回答はない。歴史史料に基づく歴史考証とはいえ、エンターテイメント主体であるドラマに対して、より専門的にアテルイ周辺の歴史を明らかにしようということであろうか。しかし、本書の構成や、巻末のアテルイ関係史料が訓読文で掲載されていることから、本書が歴史研究を専門としない人々を主対象としているようにも受け取ることができる。専門性の追求と一般読者を対象とすることは矛盾するものではないが、アテルイの知名度と歴史上の重要性を包括する座談会の意図を明確にする編目が必要だったのではなかろうか。

また座談会のメンバー構成は、文献史学から三名、考古学から二名となっているが、実質的には文献史学中心の座談会になっている。胆沢周辺の考古学的成果に広い知見を持つ伊藤氏が進行役的な立場となっており、考古学の知見が座談会の場で十分に活かされていなかったのではないかと感じる。第Ⅱ部として北上盆地の南北に対して、考古学の側からの三編が収められているが、座談会の場で考古学からの議論が深められなかったことは残念である。

最後に、アテルイとは切っても切り離せない「胆沢」である。そこで対象とされている地域をよく見てみると胆沢扇状地の北部から和我・志波が念頭に置いている。一方で、現在の奥州市前沢区・衣川区など北上盆地最南部の様相が捨象されている。文献史料からは明らかにしづらい点だけに、考古学の側から「胆沢」の社会像について積極的に発言が欲しかった。

雑駁な論述となったが、本書がアテルイ周辺の歴史像を捉えるのに利便性が高く、且つ専門性が高いことは間違い無い。東北古代史関係史料は限られているが、座談会の議論を通じて改めて気づかされた点は少ない。第一線の研究者の生の声が手元に届くことは大変貴重である。

(二〇一六年七月刊、A5判、二六三頁、定価三〇〇円＋税、

高志書院)

(さとう・ひでお 弘前大学國史研究会会員)